

# 風雲急を告げる「大学改革」

基礎教育センター長  
上野 淳

昨年、大学院設置基準の改正が公表され、本年度冒頭には、これらが施行されるに至った。

- 各大学院の人材養成に係わる目的の明確化と公表
- F Dの実施（義務化）
- 成績評価基準の明示と厳格な成績評価
- 修了認定の実施

などをその骨子とするものである。F D委員会の周辺では「大学院におけるF Dの義務化」だけが大きさに取りざたされる傾向が無きにしもあらず... ではあるが、要は大学院教育の実質化である。この大きな命題に向かって、本学でも幾つかの課題を克服することがいま迫られている。

同様の動きは学士課程においても矢継ぎ早であり、中央教育審議会・大学分科会も重要なメッセージを発信している。

- リベラルアーツを重視した教育実践
- きめ細かな学修指導体制
- 厳格な成績管理を含めた学生の出口管理
- 大学教員の教育力向上のための体制・拠点の形成・強化

などである。ここでも要は大学教育の実質化であり、全入時代において入学試験が大学生の質的保証を担えなくなった時代への警鐘と理解される。

さて、開学を機に本格的に開始されたF D活動は、既に共通教育プログラムにおける悉皆的なS E・T Eの実施が定常化し、各学部における専門教育にも着実に及んでいる状況にある。第一段階は順調に踏破したものと考える。休止することなく第二段階へと歩みを早めるべきと考える。このためには、

- 組織的なF D活動の深化
- 共通教育プログラムを端緒とする成績評価の適正化・厳格化のシステムの構築
- 都市教養プログラムを始めとする共通教育プログラムの仕組みの検証・精査

などに一層の前進が必要と考える。

○ F Dに関する研修会や講演会、学生による授業評価の教員個人へのフィードバック、などは本来の意味におけるF D活動の初歩段階・第一段階である。その先に求められているものを見極め、不断に教育改善活動を展開していく強い意志が大学には求められているといえる。

未だ、道半ばである。

